

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 1	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Childhood IQ in relation to risk factors for premature mortality in middle-aged persons: the Aberdeen Children of the 1950s study.</p> <p>中年者の幼少時知能指数と早期死亡危険因子群との関連：1950年代 Aberdeen の子供に関する研究</p>	
執筆者	
Batty GD, Deary IJ, Macintyre S.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Epidemiol Community Health. 2007 Mar;61(3):241-7.	
キーワード	
幼少時知能指数、早期死亡、アルコール大量摂取、喫煙、肥満	
要 旨	
<p>目的：</p> <p>幼少時の高知能指数が成人後の全死亡率低値と関連があることが一連の研究で示されている。この関連を説明するためにいくつかの機序が考えられている。知能指数を介した確立された危険因子のリスク低下もそのひとつである。本研究では幼少時の知能指数と成人早発死亡における確立された危険因子群（生理学的・行動学的）との関連を検討する。</p>	
<p>方法：</p> <p>1962年に学校を基盤にした調査が12150人の子供に施行され、教育記録から知能指数も抜粋された。40年後の再調査時に自己申告による早発死亡危険因子群（喫煙、アルコール大量摂取、肥満、身長、高血圧および糖尿病）の情報が得られた（n=7183；返答率63.7%）。</p>	
<p>結果：</p> <p>5340人（うち女性2687）の分析抽出群をもとにした性別調整後の分析では、幼少時の知能指数が高いほど次の項目における有病率が低かった；成人後現在までの習慣喫煙（知能指数が一標準偏差分上昇した場合のオッズ比[95%信頼区間]：0.77[0.73-0.81]）、多量飲酒（0.89[0.84-0.94]）、肥満（0.78[0.72-0.83]）、過体重（0.86[0.81-0.91]）。他にも知能指数の高い群では低身長の有病率が少なく、（喫煙者同士を比較した場合の）禁煙率が高い。これらは女性でより顕著な傾向であった（相互作用のp値≤0.04）。社会経済的要因の指標、特に中年期以降の環境、にて調節すると知能指数の違いによる危険因子の差は著しく減弱化され、ほとんどの分析において通常レベルでの有意差が消失した。</p>	
<p>結論：</p> <p>本研究結果により、知能指数-危険因子勾配は成人前の高い知能指数と（その後に見られる）低い死亡率との関連についての洞察をもたらすかもしれない。（つまり高い知能指数が確立した危険因子との関連があるために死亡率とも関わっているであろう、という意味である。訳者）</p>	